**＜第6章序章＞**（担当・藤井）

・平均的な現代人が一年に稼ぐ金額は、1800年の庶民が稼いでいた額の実質10倍から20倍上昇している。つまり、生活水準が上昇している。

→経済史学者のディアドラ・マクロスキーは「大富裕化」と呼んだ。

・この生活水準向上の最大の分け前にあずかったのは、一般の労働者と貧困者である。

・世界人口のうち一日1.25ドルで生活する人の割合は、1960年の65％から現在は21％に下がっている。

→世界規模の格差は縮まってきている。

・意外に思えるかもしれないが、「大富裕化」の原因はまだ分かっていない。

・その理由については諸説あるが、どの説にも一致していることがある。これを計画した人はいないし、予測した人もいない。繁栄は人々の相互作用から、進化にとてもよく似た形の、淘汰によってもたらされる発展によって、否応なく生じた。何より、統治者の行動とは関係なく、何百万という個人の意思決定によって実現した分散的現象である。

**＜イノベーション主義＞**（担当・藤井）

・技術革新こそが増大する利益の主要な源であり、世界全体の経済成長が停滞期にはいる兆しがない原因なのだ。

・そうであれば、この200年間の大富裕化を実現した制度は「資本主義」ではなく「イノベーション主義」だと、マクロスキーが説明するのも不思議ではない。

・イノベーションはたまたま起こるのか、それとも、もとから生み出せるものなのか？

・ポール・ローマーの主張：「技術の進歩は単なる成長の副産物ではなく、企業が意識的に行うことのできる投資である。きちんとした制度があれば、人はイノベーションを起こして、そこから報酬を得ようと試みる。」

　→もとから生みだせるものである。

・しかし、イノベーションが起こるのは、交易によって大勢の人々がアイデアを交換した結果ということ以外、経済学者はいまだに語れることがほとんどない。

→イノベーションを十分に説明できない。

・産業革命が何千という個々の部分的な知識の断片から出現したのと同じように、現代のイノベーションを予測することはできない。私たちに言えるのは、人々が自由に交換できる時にはいつでも、なぜかイノベーションが出現するということだけだ。

**＜アダム・ダーウィン＞**（担当・藤井）

・経済の進化は生物の進化と同じで、変異と淘汰のプロセスである。

・生殖が生物の進化に果たしているのと同じ重要な役割を、交換が経済の進化に果たしている。生殖なしには、自然淘汰は累積的な力にはならない。異なる系統に起こる突然変異が合流することはありえず、生存競争はどちらかを選ばなくてはならない。

例）生殖→哺乳類の偉大なイノベーション（毛皮・乳）の二つの例。

・交換は経済に同じ効果を及ぼす。

例）交換→弓矢を発明した部族と火を発明した部族の例。

・交換がイノベーションを累積することによって、経済は進化するのだ。

**＜コメント＞**

経済が進化してきたのは、開かれた自由な社会の中で人々が自由に交換できたからこそイノベーションが起こり、イノベーションを繰り返してきたから経済は進化してきたのだと思った。

本の中で、「イノベーションを意図的に引き起こすことはできない」と書いてあったが、自分的にはイノベーションは意図的に起こすことができると思うので、このことについて疑問に思った。